



TITLE:

西南海村の人口・家族・村落社会 - 歴史人口学と歴史社会学との架橋-(Digest_要約)

AUTHOR(S):

中島, 満大

CITATION:

中島, 満大. 西南海村の人口・家族・村落社会 -歴史人口学と歴史社会学との架橋-. 京都大学, 2014, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2014-05-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k18439>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

西南海村の人口・家族・村落社会
—歴史人口学と歴史社会学との架橋—

中島 満大

本研究の目的は、漁業を生業とする肥前国彼杵郡野母村（そのきぐん・のもむら）を対象とし、近世後期から近代移行期にかけて、人口や家族、そして村落社会の変容とその持続を析出することにある。その目的を達成するために、本研究ではふたつの課題を設定した。また史料としては、野母村に残る宗門改帳である『野母村絵踏帳』（1766年から1871年まで）を使用した。

第一の課題は、歴史人口学者速水融が提示した3地域仮説に関するものである。速水は、徳川社会における家族・世帯構造の特徴を「東北日本型」「中央日本型」「西南日本型（東シナ海沿岸部）」として類型化した（速水 2009）。この3地域仮説は、日本の歴史人口学的研究の集成であると同時に壮大な操作仮説である。特に野母村と3地域仮説との関係は深く、野母村の史料が発掘・分析されたことで、これまでの「東北日本型」と「西南日本型」という2類型から、「東北日本型」「中央日本型」「西南日本型（東シナ海沿岸部）」という3類型へと組成されることになった。具体的には2類型の「西南日本型」が3類型の「中央日本型」にあらためられ、野母村の知見を反映させた新たな「西南日本型（東シナ海沿岸部）」が立てられることになった。

本研究以前の野母村に関する研究から導き出された西南日本型（東シナ海沿岸部）は、「人口増加」「高出生力」「高い平均初婚年齢」「婚外出生の多さ」などが、その特徴として挙げられていた。けれども野母村や西南日本型（東シナ海沿岸部）に関しては、本研究を始めた時点では、そのほかの地域に比べて、研究がまだ途上にあり、強く検証が要請されていたと言える。

次に第一の課題を検証した先には、野母村や西南日本型（東シナ海沿岸部）の特徴が、近世後期から近代へとむかう過程のなかで、どのように変容していたのか、あるいはどの部分が持続していたのかという問いが浮上してくる。そしてそれを検討していくことが本研究の第二の課題となる。なぜならこれまで徳川社会における人口や家族の地域的多様性について議論する際には、あまり時代による変容には着目されてこなかったからである。本研究では、時系列的变化を意識しながら、野母村が有する人口や家族の地域的多様性がどのように変容していたの

かを考察した。

本研究は第 1 部「問題の所在」(序章から第 2 章まで)、第 2 部「歴史人口学が析出する村落社会の基層」(第 3 章から第 5 章まで)、第 3 部「歴史社会学が切り開く新たな地平」(第 6 章から終章まで)の 3 部で構成されている。ここからは第 2 部以降の各章について要約していく。

まず第 2 部では歴史人口学的分析を主とし、野母村における人口、出生、死亡、移動のメカニズムを解明した。既存の野母村の研究では、「人口増加」と「高出生力」という観点から、人口増加のメカニズムを導出することを中心に研究が進められてきた。けれども本研究は、人口増加のメカニズム以外にも着目し、野母という村落が「人口増加」「高出生力」という特徴からだけでは説明できないことを示した。

第 3 章では野母村の人口変動を 18 世紀後半の人口停滞期、19 世紀初頭から中葉までの人口増加期、19 世紀後半の人口停滞・減少期に分けた。それにより期間中、野母村において、常に人口が増え続けていたわけではないことを改めて確認した。また第 3 章では、野母村は、他の村落に比べて村外への流出や村外からの流入が少ないことも示した。

第 4 章においては、野母村における＜停滞－増加－停滞・減少＞という人口変動が出生率とどのように関連していたのかを検討した。19 世紀前半の人口増加期には、野母村の出生率は全国的にみても高い水準にあったが、18 世紀後半の人口停滞期や 19 世紀後半の人口停滞・減少期では、出生率の水準はそれ程高くなかった。そして人口停滞期から人口増加期への移行局面で記録された高出生力に対しては、結婚力が強く作用していた。反対に人口が停滞し、出生力が抑えられていた 18 世紀後半には、結婚力も低いことが明らかになった。さらに人口増加期から再び停滞・減少へと移行していく局面では、結婚力の下降だけではなく、夫婦出生力の低下もみられた。

次に第 5 章では、海村としての野母村の死亡に焦点をあてた。野母村では死亡クライシス(死亡率の急激な高まり)が度々起こっていたものの、一度に全人口の 2 割から 3 割が減少するような破壊的な死亡クライシスは生じていなかった。このような死亡クライシスが起こらなかったことも、野母村が人口を維持あるいは増加させることができたひとつの要因であると言える。また生命表分析から徳川社会の農村と比べて、漁業を生業とする野母村では、青年期・壮年期の男子死亡率が高く、それが平均余命に影響していた。

第3部で取り上げたのは、歴史人口学的分析であり扱われることのなかった現象、あるいは歴史人口学では分析枠組みが構築されていなかった現象である。したがって、第3部では、これまでの野母村の研究では光をあてられていなかった側面に注目した。

まず第6章では先行研究において一括りにされてきた婚外出生を「母親のみ特定できる出生」「父親のみ特定できる出生」「両親を特定できない出生」に分類した。最も多かったのは「母親のみ特定できる出生」であり、次に「父親のみ特定できる出生」、「両親を特定できない出生」と続いていた。また本章では子どもの再分配のメカニズムにも注目し、野母村では15歳以下で子どもが生まれた世帯から別の世帯へと移動しているケースが多いことが明らかになった。特に男子の場合、長男よりも次三男以降の者たちの移動が多く、早めに村落内で子どもの余剰や不足を調整していたと言える。

第7章においては、野母村の結婚パターンについて3つの視点から考察した。1点目は、結婚年齢の地域性という視点である。先行研究からは、徳川社会では東へ行くほど結婚年齢が低く、西へ行くほど結婚年齢が高い傾向（「西高東低」パターン）が指摘されており、それは「東の早婚型」と「西の晩婚型」として知られている。結婚年齢の「西高東低」パターンは、野母村の事例とも整合的であったが、そのパターンを維持しながらも、野母村の結婚年齢は近世後期から近代移行期にかけて低下していた。つまり近代に近づくにつれ、結婚年齢の地域性はその対照性の明度を下げていたと言えることができる。2点目は、未婚率の変動という視点から検討したところ、18世期後半（人口停滞期）には次三男以降の者よりも長男の方が結婚していたが、19世期（人口増加期）に入ると長男と次三男以降の者との差がなくなり、彼らは同じ水準で結婚していたことを見出すことができた。3点目は、村内婚という視点から考察した。移動の分析からも明らかのように、野母村では村外への流出や村外からの流入が少なく、結婚の多くは村内婚というかたちをとっていた。

第7章での結婚の検討に引き続き、第8章では婚姻の解消（離婚や死別）と再婚について分析を行った。まず野母村の婚姻解消をみると、他の地域よりも離婚による解消の割合が低いことがわかった。先にみた結婚年齢では「西高東低」パターンが確認されたが、離婚に関しては「東高西低」パターンがみられた。つまり本研究は、東へ行くほど離婚率が高く、西へ行くほど離婚率が低いという傾向を提示することができた。加えて再婚に関しては、子どもの年齢やその性別によ

って再婚率が異なっていた。

また第7章と第8章の分析から、野母村では近代へと至る過程の中で結婚形態の変容が生じていたことが明らかになった。たとえば、野母村では夫婦の記載と第1子の登録が同時に行われていたが、史料終盤（19世期半ば以降）では夫婦の記載を先に行い、その後で第1子の登録を行うことが多くなった。こうした傾向は、野母村における結婚年齢の低下とも重なっている。また結婚年齢の低下や結婚登録に関する形式の変容後（19世期後半）には、離婚率がそれ以前の期間と比べて高くなっていた。これは時代とともに離婚が増えていたのではなく、結婚の登録が早くなったことにより、離婚が検出されやすくなったことに起因している。結婚形態の変容は、婿入婚や足入れ婚などの結婚生活の初期には嫁方の家で生活し、初子の誕生や親の隠居などを契機として婿方の家に移るパターンから、嫁入婚と呼ばれる最初から婿方の家で結婚生活を始めるパターンへの移行を示していた。

続いて継承に関しては第9章で分析を行った。本研究では『野母村絵踏帳』内の一筆と呼ばれる編集単位の筆頭者を戸主として定義し、その交代を分析することで野母村の継承を考察した。西南日本村落研究では末子相続や末子による継承が報告されており、これらの慣習がみられることがひとつの特徴と言われてきた。実際に出生順位と継承の関係性を分析すると、次三男以降の者が優先的に継承をしている事実は確認できなかった。それに代えて、次三男以降の者たちは、長男と比べて、新たに世帯を創設することで戸主となっていた。加えて長男と次三男以降の者たちの婚姻率の差が縮小する時期（人口増加期）においては、次三男以降の者たちが戸主となる場面も多くなっていた。また死亡譲渡と生存譲渡を比べると野母村では死亡譲渡が多かったが、幕末に近づくにつれて生前譲渡の割合も高くなっていた。

第10章では婚外子のライフコースを生存率、婚姻率、戸主率から婚内子との比較を行った。婚外子の中でも「父親のみ特定できる子ども」と「両親を特定できない子ども」は、婚内子（両親を特定できる子ども）や「母親のみ特定できる子ども」と比べて異なるライフコースを歩んでおり、その差は生存率や婚姻率にあらわれていた。特に生存率では、前者は、後者に比べて生存率が低い状態にあった。このように野母村では、婚外子と一括りにすることはできず、そのなかには周縁化の圧力がかかる者たちも生活していた。すなわち近代的な戸籍制度が整備されることによって生み出されたと考えられてきた結婚外の子どもに対する周

縁化の圧力は、少なくとも徳川社会にまで遡ることができると言える。

最後に先に提示した課題に沿って、本研究が明らかにしたことを整理していこう。第一の課題として設定したのは、歴史人口学における3地域仮説、特に西南日本型（東シナ海沿岸部）の検討であった。その成果を一口に言えば、「人口増加」「高出生力」といった特徴の相対化であった。既存の研究では野母村の「人口増加」と「高出生力」を指摘・強調してきた。これらの特徴にとらわれていると、人口が停滞していた状態から増加へと転じる局面や増加から再び停滞・減少へと移行する局面を説明することができなかった。前者において、鍵を握っていたのは結婚力であり、それは長男と次三男以降の者たちとの婚姻率の差というかたちであらわれていた。こうした事例は、野母村における人口や出生抑制のメカニズムを示していると同時に、人口増加や出生率の向上も説明することができる。また後者においては、結婚力と夫婦出生力が作用することで人口や出生が抑えられていた。すなわち野母村では、家族や村落社会が置かれている状況を鑑みながら、結婚や夫婦出生力を通して、その成員たちの行動を調整していた。

では野母村の特徴、西南日本型（東シナ海沿岸部）の特徴とは何なのだろうか。それは結婚形態とそれに付随する行動規範にあると言える。野母村では婿入婚や足入れ婚などの結婚形態が主流であり、その影響が高い平均初婚年齢、第1子が誕生したタイミングで夫婦として登録する傾向などにあらわれていた。また婚外子に関しても、その内実は多様であり、なかには周縁化の圧力を受けていた子どもたちもいたが、堕胎や間引きという手段が存在していた時代にあって、彼（女）たちを包摂する村落社会であったという点にも野母村の特徴を見出すことができる。

次に第二の課題は、野母村から析出された特徴が持続しているのか、あるいは変容しているのかという問いにこたえるというものであった。野母村の結婚形態は、近代へむかう過程の中で、子どもが生まれたことを契機として宗門改帳に登録するというかたちから、先に夫婦として登録した後に子どもをもうけるというかたちへ移行していった。それは「嫁入り」の強調であり、嫁入婚の普及であった。またこの変容は、若者たちが自らの手で行ってきた結婚に「家」という存在が介入するようになったことを示唆している。

野母村でみられた変容は人口や家族に関する地域的多様性の縮減であり、「家」の生成とでもいえるべきものであった。こうした変容は、野母村だけでなく、東北地方の村落でも確認されている。たとえば、東北地方の事例では、＜人口増加（17

世紀)－人口減少(19世紀初頭)－人口増加(幕末)＞という軌跡をたどり、田畑に対して人口が不足していた人口減少期に「家」が確立していた(平井 2008)．これらの事実を踏まえると、近代移行期には地域の違いを超えて「直系家族への収斂」(落合 2004)がみられると言ってよい．

野母村と東北の事例を対比させると、野母村では増加する人口を抑制するかたちで「家」の生成がはじまり、東北村落では人口減少に対応するかたちで「家」が生成されていた．また結婚年齢に関しても、野母村では結婚年齢が上昇し、東北村落では下降していた．したがって、最も注目すべきなのは、両者が人口や家族の地域的多様性を背景とした異なる地点から出発し、変容していく経路も異なるにも関わらず、両地域に共通した現象が浮かび上がった点にある．その現象とは、言うなれば「家」の生成、あるいは「標準化された日本」の勃興であった．それではなぜ地域の違いを超えて共通の事象が生み出されたのだろうか．その要因のひとつとして、本研究は宗門改め制度ならびに宗門改帳の作成過程を挙げた．毎年の宗門改帳の作成を通じて、全国に散らばる村落に標準的な結婚(観)や「家」という要素が浸透していった可能性が高い．またこれらの現象は、明治維新以前に、地域的多様性に彩られた村落社会で、結婚や出生、継承などの日常的な領域から近代化がはじまっていることを示している．

本研究では、小さな村落で暮らす人びとの人生を追うことにより、近代化の胎動を、そしてそれに伴う「家」あるいは「標準化された日本」が生成される場面を描き出した．「家」の生成や「標準化された日本」の勃興に対しては、宗門改め制度がもつ民衆支配の力が作用していた．けれどもその一方でこれらの現象は、村落社会で暮らす彼(女)たちが、近代移行期において、日々の生活のなかで遭遇した揺らぎや危機に対応してきた地層の上に生じていたことを忘れてはならない．したがって、本研究では、双方からの力が合流した地点において、近代社会のはじまりとその胎動を確認することができた．

引用文献

- 落合恵美子，2004，「歴史人口学から見た家・村・ライフコース－小農社会論としての家・村論再考」『年報 村落社会研究 第39集』49-96．
- 速水融，2009，『歴史人口学研究 新しい近世日本像』藤原書店．
- 平井晶子，2008，『日本の家族とライフコース』ミネルヴァ書房．